山形市上下水道部だより

～山形の水、安全安心を次の100年へ～

令和5年4月

特集

山形市は5月に 水道通水100周年を迎えます。

山形市の水道事業は、馬見ヶ崎川の伏流水を主な水源として大正12年5月4日に給水を開始し、令和5年5月に通水100周年を迎えます。本号では、山形市の水道事業のこれまでの歩みをたどります。

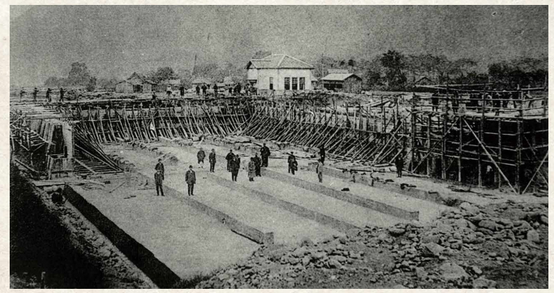
写真は松原配水場（大正12年当時は浄水場として使用）になります。通水時に建設された施設として現存する歴史を感じる施設です。建設当時の写真（上）と同じ位置で、現在の様子（右）を撮影しました。当時、配水場の周辺には何もありませんでしたが、現在は住宅に囲まれ、近隣には山形県庁の建物があります。

山形市水道100年のあゆみ

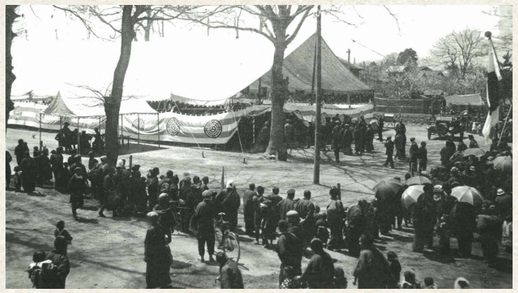
水源地地鎮祭（大正7年）

1. 山形市水道草創期　明治～大正

明治期の山形市では、馬見ヶ崎川の伏流水を井戸で汲み上げ、飲料水として活用していましたが、当時は治水の技術が未発達であったことから、豪雨のたびに土砂で河床が埋まり、水の地下浸透を妨げ、井戸枯れが多くありました。また、疫病の発生など衛生面での問題もあり、水道を必要とする声が高まっていきました。そこから水源の調査が明治後期に開始され、大正3年に水源確保の工事に着手。大正7年に水道布設の工事を開始し、財源確保に苦労しつつも、順調に工事は進み、大正12年5月に通水となりました。



配水池工事（現松原配水場）（大正10～11年頃）



山形市水道通水式（大正12年）

山形市上下水道事業管理者より

～山形の水、安全安心を次の100年へ～

山形市の水道は、今年の5月に100周年という大きな節目を迎えることとなりました。市の発展とともに歩みを続けた100年の間に、四次にわたる大規模な拡張事業を経て、現在に至るまで安全な水道水を安定してお届けすることができております。山形市の水道が生活基盤に欠かせない重要なインフラの役割を果たしてきたことは、水道の創設とその後の発展に携わった先人たちの努力と、市民の皆さまをはじめ、水道関係各位のご理解とご協力によるものと改めて実感しております。この場をお借りして、深く感謝申し上げます。

これからも安全安心の山形市の水道を次の100年へつなげていくため、職員一丸となって取り組んで参ります。

令和5年4月　　山形市上下水道事業管理者　庄司　新一

水道通水100周年を記念して、様々な事業を企画しています。

※詳細は、上下水道部公式ホームページやツイッターを通してお知らせしていきます。

6/2　水道通水100周年記念式典

7/30　水道通水100周年記念夏祭り

水を使ったアトラクション、水を使った縁日屋台や工作教室、市民の皆様に楽しんでいただける夏祭りを開催します。

蔵王ダム

10/12 14　水道通水100周年記念施設見学バスツアー

山形の水道の歴史を振り返るとともに、水道事業および水道施設を身近に感じてもらえるバスツアーを開催します。

ツイッター、YouTubeで上下水道に関する情報発信中です！！

山形市上下水道部では、ツイッターアカウント、YouTubeチャンネルを開設しています。ツイッターでは最新のお知らせや断水などの緊急情報をいち早く発信し、YouTubeでは上下水道部の日々の取組みや水まわりのお役立ち情報を動画でわかりやすく紹介しています。

ツイッターのフォローと、YouTubeのチャンネル登録をお願いします！

Web版YouTubeより

Web版Twitterより

Twitter
山形市上下水道部
（ID:@yamagatasuidou）

YouTube
山形市上下水道部
公式チャンネル

上下水道部公式ホームページ
山形市上下水道部　検索
https://suidou.yamagata.yamagata.jp/

山形市上下水道部　〒990-0836 山形市南石関27番地　TEL 645-1177（代表）

発行／山形市上下水道部経営企画課

3. 量から質の時代　平成

これまで「量の確保と水道普及率の向上」を目指してきた水道事業ですが、「おいしい水」のブームなど人々の水に対する関心が高まり、質的向上を目指す時代となりました。平成5年に見崎浄水場の自動運転、集中監視制御を開始し、平成9年には生物活性炭吸着による高度浄水処理施設が完成しました。この施設により、よりおいしい水を供給することができるようになりました。

見崎浄水場高度浄水処理施設完成式典
（平成９年）　画像提供／山形放送株式会社

松原浄水場新築整備事業（平成18年）

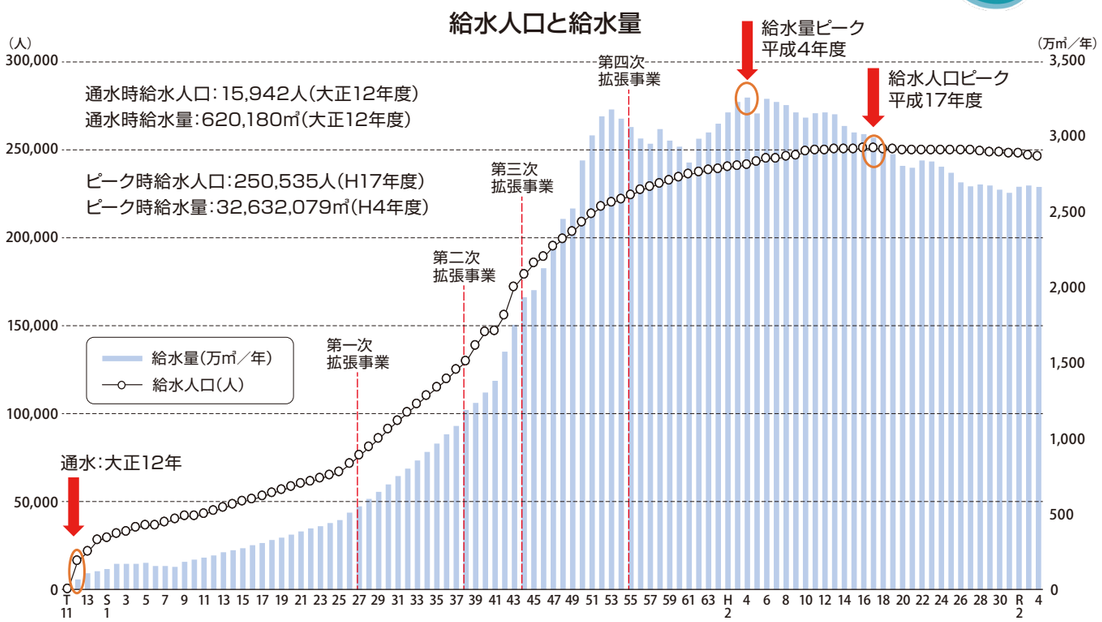
震災用緊急貯水槽整備工事
上下水道施設管理センター敷地内（平成21年）

4. 次の100年へ
～持続可能な水道を目指して～

そして、市民生活に欠かせないライフラインとなった水道を維持していくための取組みが始まりました。浄水場の無人運転による事業の効率化や小水力発電等の再生可能エネルギーの活用、耐震化による災害対策の強化。次の100年を実現する持続可能な水道を目指して、これからも安全安心を皆さまへお届けしていきます。

▶▶▶グラフでたどる山形市の水道100年◀◀◀
～給水人口と給水量はどのように変化したか～

大正12年、水道通水時の給水人口は約16,000人、給水量は約62万㎥でした。水需要は平成4年度にピークを迎え、給水量は通水当時の約50倍にあたる約3,260万㎥にまで増加しました。その後は給水人口と給水量ともに減少傾向にありますが、水道普及率は99.95%となり、ほとんどの市民の皆さまに水道水の供給を行っています。



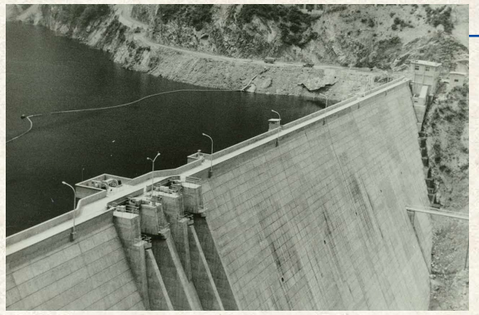
2. 水道の拡張期　昭和

山形市の水道事業は、昭和戦後期からの社会経済の発展に合わせ、第一次～第四次拡張事業を実施し、給水能力を向上させてきました。

●第一次拡張事業（昭和27～33年度）

戦後復興の進展と市域の拡大により、急速に人口が増加したことに伴って、給水量も大幅に増え、拡張工事が必要となりました。昭和28年に不動沢砂防ダム貯留水を水源に加え、松原浄水場に導入することにより、その水需要の増加に対応しました。

不動沢ダム建設（昭和27年頃）



蔵王ダム（昭和46年頃）

●第二次拡張事業（昭和38～45年度）

昭和30年代より日本は高度経済成長が始まりました。山形市も人口が増加し、さらに給水区域の拡大もあり、水需要は増加の一途をたどりました。そして、蔵王ダムを建設する計画が進められ、松原浄水場・東沢浄水場への導水を開始しました。

旧松原浄水場管理本館
（昭和46年頃）

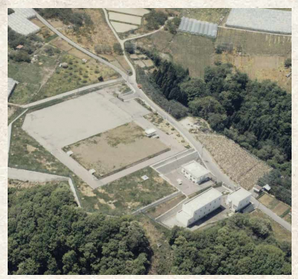
●第三次拡張事業（昭和44～51年度）

昭和40年代も、引き続き高度経済成長が進展しました。人々の生活の質も向上し、給水量も増加し続けました。そして、蔵王山系を水源とする拡張は限界を迎え、最上川から取水する計画に着手。昭和46年、第一期工事により最上川取水場（中山町内）・見崎浄水場が完成、通水を開始しました。その後、昭和50年の第二期工事の完了により、見崎浄水場の浄水能力は当初の４万㎥/日から８万㎥/日となりました。

見崎浄水場見学会（昭和50年）

●第四次拡張事業（昭和55～63年度）

寒河江ダム（建設中）（昭和50年代）



南山形配水場（平成元年）

将来増加する水需要に十分対応できるように、山形県企業局で運営している「寒河江ダム」を水源とした村山広域水道用水供給事業より受水することとしました。昭和59年に南山形配水場が完成し、村山広域水道からの暫定受水を開始。平成2年に寒河江ダムが完成し、平成4年に本格的な受水が始まりました。